

なぜ言論の自由は必要か

— J. S. ミルの『自由論』を読んで —

成 田 和 信

はじめに

こんにちは、成田和信です。私は、創価大学に着任して2年と3か月になります。それ以前は、慶應義塾大学に33年間勤めていました。私の専門は、現代の倫理学、とくに「分析倫理学」と呼ばれる分野です。したがって、今日の話は、私が専門にしていることではないのですが、皆さんにぜひ聞いてもらいたいと思って選びました。

今日お話しするのは、ジョン・ステュアート・ミル John Stuart Mill (1806年生～1873年没)が『自由論 *On Liberty*』(1859年)の中で展開している「言論の自由」についての議論です。ミルは『自由論』の中で、なぜ言論の自由が必要であるのか、その理由を粘り強く説いています。ミルの英語の文章は、一つひとつの文がとても長いうえに、挿入句や二重否定が多くて、決して読みやすくはないのですが、読んでいっているうちに、言論の自由の必要性に対するミルの熱意がひしひしと伝わってきます。私は、言論の自由の必要性に関するミルの考えをぜひ皆さんに知ってもらいたいと思って、今日の話のテーマに選びました。そして皆さんには、『自由論』をぜひ自分で読んでもらいたいと思っています。もちろん、英語で読んでもらうに越したことはないのですが、翻訳でも結構です。幸いなことに、日本には優れた翻訳があります。私が最もお薦めしたい翻訳は、関口正司さんが訳した『自由論』(岩波文庫)です。ミルの英文を日本語にするのは、とても難しいですが、関口さんは、そのミルの英文を読みやすい自然な日本語に訳しており、しかも、その訳はとても正確です。ぜひ、手にとって読んでみてください。関口さんは、ミルの『功利主義 *Utilitarianism*』(1861年)の訳(岩波文庫)も出していて、今日の話では『自由論』と『功利主義』からの引用が出てきますが、すべて関口さんの訳を使います。

私が今日お話しすることは、皆さんが自分で『自由論』を読むための読書案内である、とも言えるでしょう。とは言っても、私は『自由論』全体の内容を案内するわけではありません。『自由論』の第2章で書かれていることを主にお話します。その章でミルは、言論の自由の必要性を

Kazunobu Narita (創価大学院文学研究科教授、慶應義塾大学名誉教授)

本稿は「J・S・ミル没後150周年記念講演会」(池田大作記念創価教育研究所主催、2022年6月27日、創価大学ディスカバリーホールにて開催)における講演「なぜ言論の自由は必要か—J.S.ミルの『自由論』を読んで」の原稿に加筆修正を施したものである。

説いています。しかし、言論の自由を無制限に認めるべきである、と主張しているわけではありません。他者への危害を積極的に扇動するような言論は禁止すべきである、と言っています。たとえば、穀物商の家の前に集まった興奮状態にある群衆に向けて、穀物商は貧者を飢えさせているとか、私有財産は強奪である、といったことを声に出して言ったり、ビラにしてその群衆に配ったりするのは、処罰の対象になる、と述べています（『自由論』、第3章、第2段落）。ただ、ミルが「危害」として念頭においているのは、どのような種類の危害なのか、また、どのくらいひどい危害なのか、また、「扇動」として念頭においているのは、どのような種類の行為なのか、ということを見きわめるのはとても難しいです。これは、ミルを解釈するうえでの難問のひとつです。たとえば、ミルであったら、街頭で行われるヘイトスピーチやSNSを通じてなされる過激な発言に関する制限についてどのような見解を示すのか、ということは、多くの議論を必要とする難しい問題です。私は、残念ながら、この問題に対する明確な答えを今のところもっていません。したがって今日は、この問題については触れません。今日は、なぜ言論の自由は必要なのか、という問いに対するミルの回答に絞ってお話したいと思います。

1 牧口常三郎とミルと言論の自由

ところで、言論の自由に関してミルが展開した議論を紹介する前に、牧口常三郎に少し触れておきたいと思います。私は、創価大学に着任するまで、牧口常三郎という思想家がいたことは知りませんでした。ゼミの学生から話を聞いたり、日本思想史の事典を参照したりして、牧口常三郎がどのような人であったかを少しずつですが学びました。創価教育の思想を生み出した牧口常三郎の研究を目的のひとつとしている、創価教育研究所が主催する講演会でミルの話しをするに際して私は、牧口はミルの著作を読んだのであろうか、という疑問をもちました。ちょうどそんなとき、伊藤貴雄先生から、『人生地理学』の第27章の末尾にある参考文献表に「ミル氏『高等経済原論』（天野文学士訳）」という記述があることを教えていただきました。それを手がかりにして調べてみますと、『高等経済原論』とは、ミルの『経済学原理 *Principles of Political Economy*』を J.L. ラフリン Laughlin が編纂して縮小したものを、天野為之がわかり易いように補足を加えて、翻訳したものであることがわかりました。ミルは、哲学・倫理学、政治学、経済学、文学といった様々な分野で優れた業績を残しましたが、『経済学原理』は、経済学に関するミルの中心的な著作です。牧口は、その著作の少なくとも一部を読んでいたことがわかりました。では、牧口は『自由論』を読んでいたのでしょうか。残念ながら私には、今のところわかりません。

しかし他の意味で、牧口常三郎と言論の自由は、とても深い関わり合いがあります。というのは、牧口は、太平洋戦争中の言論弾圧の犠牲になったからです。牧口は、1943年に治安維持法違反と不敬罪のかどで、逮捕投獄され、1944年に獄死しています。その事情は、伊藤貴雄先生の論文「牧口常三郎の戦時下抵抗」（『創価教育』2号、2009年、4号、2011年）で詳しく説かれています。ぜひ、みなさんも読んでみてください。戦時下において、言論や思想の自由がどのように踏みじられたのが、当時の思想的背景とともに、とてもよく理解できます。

2 ミルの功利主義

それでは、言論の自由の必要性についてミルがどのような議論を展開しているのか、お話ししましょう。ミルは、功利主義という考え方にもとづいて、言論の自由の必要性を説いている、と私は理解しています。そこでまず、功利主義がどのような考え方であるのかを説明しましょう。

功利主義は、帰結主義という考え方のひとつです。帰結主義とは、行為の道徳的な正しさや悪さ（不正さ）は、その行為が生み出す帰結（結果）の良し悪しによって決まる、という考え方です。すなわち、帰結主義によれば、行為が良い帰結を生み出せば、その行為は道徳的に正しい行為になり、悪い帰結を生み出せば、その行為は道徳的に不正な行為になります。ところで、行為の帰結の良し悪しは、どのように決まるのでしょうか。これに関して功利主義は、幸福総量説という考え方をとります。ここで言う「幸福の総量」とは、すべての人々の幸福を足し合わせたもののことです。幸福総量説は、ある行為を行った結果、幸福の総量が大きくなればなるほど（そして、不幸の総量が小さくなればなるほど）、その行為の帰結は良い帰結であり、幸福の総量が小さくなればなるほど（そして、不幸の総量が大きくなればなるほど）、その行為の帰結は悪い帰結である、と主張します。功利主義は、このような仕方で行為の帰結の良し悪しを測り、それにもとづいて、その行為が道徳的に正しいかどうかを決めます。だから功利主義とは、帰結の良し悪しに関して幸福総量説を採用する帰結主義である、と言えるでしょう。

ミルは『功利主義』の第2章の第2段落で、次のように述べています。

行為は幸福を増進する傾向があれば、その度合に応じて正しいものとなり、幸福とは反対のものをもたらす傾向があれば、その度合いに応じて不正なものとなる。

この引用の「幸福」という言葉でミルが念頭においているのは、すべての人々の幸福であり、「幸福とは反対のもの」という言葉で念頭においているのは、すべての人々の不幸である、と私は理解します。この引用によれば、行為がすべて人々の幸福を増す傾向があればあるほど、その行為は正しくなり、すべての人々の不幸をもたらす傾向があればあるほど、その行為は不正になるわけです。したがって、この引用から、ミルが功利主義を採用していたことがわかるでしょう。ただ、功利主義の基本的な考え方は今述べた通りなのですが、功利主義にはさまざまな形態があり、それらは細部においてそれぞれ異なっています。ミルがどのような形態の功利主義を採用していたかについては、さまざまな解釈があり、今でも論争が続いています。しかし今日の話を理解するためには、まずは、ミルが功利主義を採用していたこと、そして、功利主義の基本的な考え方は今述べたようなものであることを確認しておくだけで十分であると思います。

さて先に私は、ミルは功利主義にもとづいて言論の自由の必要性を説いている、と述べました。しかし、どのような仕方ではミルは、功利主義にもとづいて言論の自由の必要性を説いているのでしょうか。それを説明するためには、ミルの言う「幸福」とは何であるのか、お話ししなければなりません。ミルは『功利主義』のなかで「幸福とは快樂を意味しており、苦痛の欠如も意味している。

不幸は苦痛を意味しており、快樂の欠如も意味している」(第2章、第2段落)と述べています。この文章からわかるようにミルは、幸福とは快樂を享受することであり、不幸とは苦痛を経験することである、と考えていました。

このようにミルは、幸福とは快樂の享受である、と考えていたわけですが、快樂がどれほど幸福をもたらすかは、その快樂の量ばかりでなく質によっても左右される、と主張しています。たとえば、『功利主義』の第2章の第4段落で、次のように述べています。

快樂の種類によって、ある快樂は他の快樂よりも望ましく、より多くの価値をもっているということは、功利の原理と十分に両立する。他のあらゆる物事の評価に関しては量ばかりでなく質も考慮に入れているのに、快樂の評価に関しては量だけに頼るとするのは、理にかなわないだろう。

ここで言われている快樂の「量」とは、快樂の強度と持続時間のことです。また、ここで言われている快樂の「質」とは、この引用からも読みとれるように、異なる種類の快樂があった場合に、それらの快樂の種類が異なるがために、それらの快樂がそれぞれ備えている異なる性質のことであります。ミルは、快樂の典型的な種類として、肉体的な快樂と精神的な快樂(すなわち、知性、感情、想像力、道徳的感情などからもたらされる快樂)を挙げています(『功利主義』、第2章、第4段落)。そして、肉体的な快樂と精神的な快樂は、その種類が異なるため、異なる質をもつ、と考えていました。ミルは、今示した引用からわかるように、そのような質も、量と同じように、快樂の価値を左右する、と主張します。すなわち、快樂の量が多ければ多いほど、それだけ、その快樂の価値が高くなるのと同じように、快樂の質が高ければ高いほど、それだけ、その快樂の価値が高くなる、というわけです。そしてミルは、快樂の価値が高ければ高いほど、それだけ、その快樂の享受は人々に幸福をもたらす、と考えていました。この考え方によれば、(今述べたように、快樂の価値は、快樂の量ばかりでなく質によっても決まるわけですから)、快樂が量と質の点で優れていればいるほど(すなわち、その快樂の量が多ければ多いほど、そして、質が高ければ高いほど)、その快樂の享受は人々を幸福にする、ということになります。ミルは、幸福と快樂の量と質の関係をこのように考えていたわけです。

さて、このミルの考えと、功利主義の基本的な考え方を結びつければ、人々が量と質の点で可能なかぎり優れた快樂を享受できるような帰結をもたらす行為が道徳的に正しい、ということになります。この結論をミルは、次のように表現しています。

最大幸福の原理によれば、究極の目的は、量と質のいずれの点においても、可能な限り苦痛を免れていて、可能な限り快樂が豊富な生活状態である。(『功利主義』、第2章、第10段落)

ここで言われている「最大幸福の原理」とは、功利主義の原理のことです。したがって、この引用では、功利主義によれば、量と質のいずれの点においても、可能なかぎり優れた快樂を人々が享受できるようにすることが、目指されるべき目的である、と主張されているわけです。この主張によれば、我われは、そのような目的を達成するように行為すべきであり、そのような行為が道徳的に正しい行為である、ということになります。

さて、今述べたようにミルは、快樂を享受することが幸福である、と考えていたわけですが、『自由論』の第3章の第2段落では、「個性の自由な発展が、幸福の主要な要素の一つ」である、と述べています。ここで言われている「個性」とは、(自分独自の欲求や衝動に導かれた)自発性にもとづいて自分の諸能力を自分なりに発展させ發揮する、という在り方のことです(『自由論』第3章、第2段落)。そして、そのような能力としてミルは、たとえば、「知覚、判断、物事を見分ける感覚、知的な活動、そして、道徳的な優先順位付け」(『自由論』第3章、第3段落)といった能力、あるいは、「見るために観察し、予見するために推理して判断し、意思決定するために判断材料を収集し、結論をだすために識別力を發揮し、さらに結論に到達したら、自分の考え抜いた上での結論を貫き通す強固な意志と自制心を働かせる」(『自由論』第3章、第4段落)能力を念頭においていました。ミルによれば、このような能力を(自分独自の欲求や衝動に導かれた)自発性にもとづいて自分なりに発展させ發揮するところに個性が現れるのです。そしてミルは、そのような個性の発展が「幸福の主要な要素の一つ」である、と主張しているのです。

このようにミルは、『功利主義』では、快樂を享受することが幸福である、と主張し、『自由論』では、個性の発展が幸福の主要な要素である、と主張しているわけですが、これら二つの主張は、どのように関係しているのでしょうか。この問いに対して、私は次のように答えたいと思います。先に述べたように、ミルは、快樂には質があり、そして、その質が高ければ高いほど、その快樂は幸福をもたらす、と考えていました。ところでミルは、個性を發展させることによって快樂を得られ、そのようにして得られる快樂は質が高い、と考えていたのではないかと私は思っています。今述べたように、個性の發展は、認識力、判断力、推論力、意志による決定力、道徳的な評価力などといった能力を自発性にもとづいて自分なりに發展させ發揮することによってなされます。そして、これらの能力はすべて、精神的な能力です。さらに、ミルによれば、精神的な能力の發揮によって得られる精神的な快樂は、質が高いわけです。だから、我われは、各自が備えている(今述べたような)精神的な能力を自発性にもとづいて自分なりに發展させ發揮することで、すなわち、個性を發展させることで、精神的な快樂を得られ(そして、その快樂は質が高いわけですから)、その結果、多に幸福になる、と考えられます。この意味で、個性の發展は幸福の主要な要素になる、とミルは考えていたのではないのでしょうか。そして、そうであるとすれば、快樂を享受することは幸福である、というミルの主張と、個性の發展が幸福の主要な要素である、というミルの主張は、整合的に結びつきます。

以上のように、我われは、個性を發展させることによって(すなわち、精神的な能力を自発性にもとづいて自分なりに發展させ發揮することによって)質の高い快樂を得ることができ、その

結果、幸福になる、とミルは考えていたのではないかと私は理解しています。そして、ミルがそのように考えていたとすれば、(ミルは功利主義を採用していたわけですから) きっと、次のように考えていたにちががありません。

<個性を重んじる功利主義>

我われは、なるべく多くの人々が精神的な能力を(自分独自の欲求や衝動に導かれた)自発性にもとづいて自分なりに発展させ発揮する(すなわち個性を発展させる)ことによって質の高い快樂(すなわち幸福)をできるだけ多く享受する、という状態を実現するように行なうべきである。

この考えを「個性を重んじる功利主義」と呼ぶことにしましょう。ミルは、この「個性を重んじる功利主義」にもとづいて、言論の自由の必要性を説いているのではないかと私は考えます。それでは、この私の考えが正しいとして、ミルはどのような仕方、「個性を重んじる功利主義」にもとづいて言論の自由の必要性を説いているのでしょうか。このことを説明するために、まずは、言論の自由の必要性についてミルがどのような議論を展開しているか見てみましょう。

3 言論の自由に関するミルの議論

ミルは『自由論』の第2章の第1段落で、次のように述べています。

一人以外の全員が同じ意見で、その一人だけが反対の意見だったとしても、その一人を他の全員で沈黙させるのは不当なことである。その一人が権力をもち、それによって他の全員を沈黙させるのが不当なのと同じである。

この文章には、言論の自由に対するミルの強い思い入れが現れています。この文章でミルは、ひとりの人から意見を表明する自由を奪うことは、そのひとりの人が権力を使って他のすべての人々から意見を表明する自由を奪うのと同じように、不当なことである、と主張しています。では、なぜミルは、これほどまでに言論の自由が必要である、と考えたのでしょうか。ミルがそう考えた理由は少なくとも三つある、と私は考えます。その三つの理由をまとめると、次のようになります。

第一の理由：言論の自由がなければ、真理に近づくことはできない。

第二の理由：意見が真理を表していたとしても、言論の自由がなければ、その意見の意味を生きたまま理解することができず、その結果、その意見はドグマになる。

第三の理由：言論の自由がなければ、どんな意見でも、その正当性の根拠を失う。

それでは、これらの三つの理由を順番に説明することにしましょう。

まず、第一の理由から説明しましょう。『自由論』の第2章の第4段落で、ミルは次のように述べています。

人類の可謬性という事実は、理論の上では、いつでも重要性が認められながらも、実際の判断ではまったく重視されていない。

この文章でミルは、二つのことを言っています。ひとつ、人は誤り得る、ということです。このことをミルは、「人類の可謬性」と呼んでいます。もうひとつは、人々は、自分は誤り得る(可謬性)、という事実を頭では理解していても、実際に判断を下すときには、その事実を無視してしまう、ということです。人は誤り得る、という事実を無視する、ということは、自分は誤ることはないと思ひ込む、ということです。自分は誤ることはない、と思ひ込むことをミルは、「無謬性の想定」と呼んでいます。そして、無謬性の想定について、次のように述べています。

ある意見が誤りだと自分たちは確信しているからという理由で、その意見に耳を傾けようとしないのは、自分たちの確信を絶対的確信と同じものだと想定することである。討論を沈黙させることは、…… 無謬性を想定することなのである。(『自由論』、第2章、第3段落)

ここでミルは、自分は誤ることはない、と思ひ込むこと(無謬性の想定)は、自分の意見とは異なる意見(これ以降、このような意見を「反対意見」と呼ぶことにしましょう)に耳を傾けずに、その意見を封じる、という振る舞いとして現れる、と主張しています。そしてミルは、反対意見を封じる手段としては、法律による刑罰や世論による圧力を挙げています。すなわちミルは、無謬性の想定は、法的刑罰や世論による圧力によって反対意見をもつ人から言論の自由を奪う、という振る舞いを引き起こす、と考えているわけです。

このようにミルは、人は実際には誤り得る(可謬)にもかかわらず、自分は誤ることはない(無謬)と誤って想定して、その結果、反対意見をもつ人から言論の自由を奪ってしまうことがある、と考えているわけですが、さらにミルは、反対意見をもつ人から言論の自由を奪ってしまうと、真理に近づくことができなくなる、と説いています。このことをミルは、二つの場合に分けて、説明しています。ひとつは、自分の意見が誤りで反対意見が真理である場合です。その場合には、反対意見を封じることによって、反対意見で言われている真理を獲得する機会を逃すこととなります。このことをミルは、次のように表現しています。

意見表明を沈黙させることには独特の弊害がある。…… もしその意見が正しいのであれば、人々は誤謬を真理に取り替える機会を失う。(『自由論』、第2章、第1段落)

もうひとつは、自分の意見が完全に誤りではないけれど、完全に真理でもない、すなわち、部分的な真理しか含んでいない場合です。ほとんどの意見は、完全に誤りでもなく、また、完全に真理でもなく、部分的に真理であると同時に部分的に誤りである、とミルは考えています（『自由論』、第2章、第34段落）。そして、次のように述べています。

広く受け入れられている主張も真理の一部しか含んでいないので、真理の残りの部分を補うために反対意見が必要になる。（『自由論』、第2章、第34段落）

この文章でミルは、自分の意見の中の誤った部分を修正し、真理に近づくためには、反対意見に耳を傾けることが必要である、と主張しています。この主張によれば、反対意見を封じてしまうと、自分の意見の中の誤った部分を修正する機会を失い、その結果、真理に近づく道を閉ざしてしまうことになるわけです。

以上のように、ミルによれば、自分の意見が誤りで反対意見の方が真理である場合にも、また、自分の意見が真理の一部しか含んでいない場合にも、反対意見を封じてしまうと、真理に近づくことができなくなります。だから、言論の自由は必要である、とミルは主張します。これが、言論の自由が必要であるとミルが考える第一の理由です。

それでは次に、第二の理由について説明しましょう。ミルは『自由論』の第2章の第21段落で、次のように述べています。

自分の意見がどれほど真理をとらえていても、十分に、頻繁に、また忌憚なく議論されなければ、その意見は、生き生きとした真理ではなく、死んだドグマとして信奉されてしまうだろう……。

また、『自由論』の第2章の第26段落では、次のように主張しています。

討論の行われていないときに頻繁に起こるのは、意見の根拠ばかりでなく意見の意味そのものまで忘れ去られてしまう、ということである。……鮮明な概念や生き生きとした確信の代わりに、機械的に暗記されたわずかばかりの言葉だけが残る。

さらに、『自由論』の第2章の第43段落では、次のように書いています。

意見が……真理の全体であったとしても、活発で熱心な論争が許され……ていなければ、その意見を受け容れているほとんどの人々は、意見の合理的な根拠を理解したり感じとったりすることが少しもないまま、偏見の形でその意見を信奉することになるだろう。そればかりでなく、……主張の意味そのものが失われたり弱まったりして、性格や

行為に対する生き生きとした影響力を失う危険が出てくるだろう。教義はたんなる形式的な口先だけの言葉になり、…… 実感のこもった本物の確信が理性や個人的経験から成長していくのを妨げることになる。

これらの文章から、反対意見を封じることは二つの弊害をもたらす、とミルが考えていたことが読み取れます。ひとつは、自分の意見が真理であるとしても、その意見は生き生きとしたものなくなる、という弊害です。意見が生き生きとしている、ということは、その意見を実感をともなったものとして理解しており、その結果、その意見が自分の行為や性格に影響を与える、ということです。したがって、意見が生き生きとしたものでなくなる、ということは、その意見が実感をともなわない空虚な言葉になり、自分の行為や性格に対する影響力を失う、ということです。今挙げた引用からわかるように、我われは反対意見をもつ人と常に議論を戦わせることによって始めて、自分の意見を生き生きとしたものとして保つことができる、とミルは考えています。だから、反対意見をもつ人から言論の自由を奪ってしまうと、そのような議論ができなくなり、その結果、自分の意見が真理であるとしても、その意見は生き生きとしたものでなくなってしまうわけです。反対意見を封じることは、このような弊害をもたらす、とミルは考えています。

反対意見を封じることもたらす、もうひとつの弊害は、自分の意見の根拠（理由）を明確に理解しないまま、口先だけのドグマとしてその意見をただ信じることになる、という弊害です。我われは、反対意見をもつ相手と議論を戦わせることによって、なぜ自分の意見の方が妥当であるのか、その根拠を確認し、相手にそれを示そうとします。そして、そのような活動を通じて、自分の意見の根拠を明確に理解することができるのです。だから、反対意見を封じて、そのような議論を戦わせることがなくなれば、自分の意見の根拠を相手に示す必要もなくなり、自分の意見の根拠が何であるのかを考えなくなります。その結果、自分の意見の根拠を理解することなく、自分の意見をただ盲目的に信じることとなります。反対意見をもっている人から言論の自由を奪って、その意見を封じることは、このような弊害もたらす、とミルは考えています。

以上のようにミルは、人々から言論の自由を奪って、反対意見を封じてしまうと、人々は議論を戦わせることがなくなり、その結果、今述べたような弊害が生ずる、と考えていました。そして、言論の自由を確保して、人々が議論を戦わせれば、人々は、自分の意見の根拠を明確に理解するようになり、その意見は、人々の行為や性格を導くような生き生きとした活力を備える、と考えていました。だから、言論の自由は必要である、というわけです。これが、言論の自由が必要であるとミルが考える第二の理由です。

それでは最後に、第三の理由を説明しましょう。ミルは『自由論』の第2章の第6段落で、次のように述べています。

われわれの意見に向かって論駁し反証する完全な自由こそ、……その意見を真理だとわれわれが想定するのを正当化する条件なのである。これ以外の条件では、人間の諸能力

をどう働かせても、真理かどうかについて合理的な確信をもつことはできない。

また、『自由論』の第2章の第7段落では、次のように書いています。

自分自身の意見と他人の意見を照らし合わせて自分の意見を訂正し補完する習慣は、
…… 自分の意見に正当な自信をもつための揺るぎない唯一の根拠になる。

これらの文章でミルは、自分の意見に対して反論する自由を他の人々に与え、その反論に応じて自分の意見を擁護したり、あるいは、訂正したりする習慣がなければ、自分の意見は正当性を失う、と主張しています。意見が正当性をもつ、ということと、意見が真理である、ということとは必ずしも同じではありません。意見が正当であるとは、その意見が真理ではないかもしれないが、信じるに足るものである、ということです。先に述べたように、ミルは、人は誤り得る(可謬である)、と考えていました。ということは ミルによれば、我われは完全な真理を獲得することできないかもしれません。しかし、そうであるとしても、我われは、自分の意見に対するいかなる反論も許し、その反論を論駁したり、その反論によって自分の意見を訂正していくことで、自分の意見に正当性を与えることはできます。すなわち、反対意見をもつ人々の言論の自由を確保することによって、自分の意見の正当性が保証されるわけです。だから、言論の自由が必要である、とミルは主張します。これが、言論の自由が必要であるとミルが考える第三の理由です。

4 功利主義による言論の自由の擁護

私は、先に述べたように、ミルは功利主義にもとづいて言論の自由の必要性を説いている、と理解しています。ミル自身も『自由論』の第1章の第11段落で「私は、あらゆる倫理的な問題に関する究極の判断基準は、功利であると考えている」と述べています。そして、言論の自由の問題も倫理的な問題のひとつですから、ミルは功利主義にもとづいて言論の自由の必要性を説いている、と考えて間違いはないでしょう。ではミルは、どのような仕方で、功利主義にもとづいて言論の自由の必要性を説いているのでしょうか。この点に関してミルは、自分の考えを明確に示しているわけではありません。だから、この点に関してミルがどのように考えていたかは、ミルが実際に述べていることから推測するしかありません。そこで、私の推測を紹介することにししましょう。

ミルがどのような仕方で功利主義にもとづいて言論の自由の必要性を説いているのかを考えるさいに確認しておかなければならないことが二つあります。ひとつは、先に述べたように、ミルは「個性を重んじる功利主義」を採用していた、ということです。繰り返しになりますが、「個性を重んじる功利主義」とは、以下のような内容の考え方です。

<個性を重んじる功利主義>

我われは、なるべく多くの人々が精神的な能力を（自分独自の欲求や衝動に導かれた）自発性にもとづいて自分なりに発展させ發揮する（すなわち個性を發展させる）ことによって質の高い快樂（すなわち幸福）をできるだけ多く享受する、という状態を実現するように行為すべきである。

もうひとつは、今示したように、言論の自由が必要である理由としてミルが次の三つの理由を挙げている、ということです。

第一の理由：言論の自由がなければ、真理に近づくことはできない。

第二の理由：意見が真理を表していたとしても、言論の自由がなければ、その意見の意味を生き生きとした仕方で理解することができず、その結果、その意見はドグマになる。

第三の理由：言論の自由がなければ、どんな意見でも、その正当性の根拠を失う。

さて私は、言論の自由が必要である理由としてミルが挙げたこれら三つの理由は「個性を重んじる功利主義」にもとづいて提出されている、と考えます。この私の考えが正しければ、ミルは「個性を重んじる功利主義」にもとづいて言論の自由の必要性を説いている、と行うことができるでしょう。そこで、なぜ私が、これら三つの理由は「個性を重んじる功利主義」にもとづいて提出されていると考えるのか、そのわけを説明しましょう。

ミルは、これら三つの理由で言われていることが、それぞれ、言論の自由が必要である理由になると考えたわけですが、なぜミルはそのように考えたのでしょうか。第一の理由では、「言論の自由がなければ、真理に近づくことはできない」と言われているわけですが、なぜミルは、このことが、言論の自由が必要である理由になると考えたのでしょうか。それは、ミルが、人々が真理に近づくことは重要である、と考えたからでしょう。すなわちミルは、人々が真理に近づくことは重要であり、言論の自由がなければ、真理に近づくことができないから、言論の自由は必要である、と考えたのでしょうか。また、第二の理由では、「言論の自由がなければ、意見の意味を生き生きとした仕方で理解することができず、その結果、その意見はドグマになる」と言われているわけですが、なぜミルは、このことが、言論の自由が必要である理由になると考えたのでしょうか。それは、ミルが、人々が自分の意見を生き生きとした仕方で理解することは重要である、と考えたからでしょう。すなわちミルは、人々が自分の意見を生き生きとした仕方で理解することは重要であり、言論の自由がなければ、人々は自分の意見を生き生きとした仕方で理解できないから、言論の自由は必要である、と考えたのでしょうか。さらに、第三の理由では、「言論の自由がなければ、どんな意見でも、その正当性の根拠を失う」と言われているわけですが、なぜミルは、このことが、言論の自由が必要である理由になると考えたのでしょうか。それは、ミルが、人々の意見が正当性を備えることは重要である、と考えたからでしょう。すなわちミルは、人々の意見が正当性を備えることは重要であり、言論の自由がなければ、人々の意見は正当性を失う

から、言論の自由は必要である、と考えたのでしょうか。以上のように、言論の自由が必要である理由としてミルが挙げた三つの理由が、それぞれ、言論の自由が必要である理由になるとミルが考えたのは、ミルが、次の三つの事柄が重要である、と考えていたからであると思われます。

(事柄1) 人々が真理に近づくこと

(事柄2) 人々が自分の意見を生き生きとした仕方で理解すること

(事柄3) 人々の意見が正当性を備えること

では、なぜミルは、これらの三つの事柄が重要である、と考えたのでしょうか。それは、これら三つの事柄が「個性を重んじる功利主義」が目指す目的を実現するためには欠かせない、とミルが考えていたからではないかと私は推測します。この推測の裏付けとして、これら三つの事柄が「個性を重んじる功利主義」が目指す目的を実現するために欠かせないと言える理由を少なくとも三つ挙げることができます。

まず、ひとつ目の理由を述べましょう。「個性を重んじる功利主義」が目指す目的を実現するためには、どのようにしたらその目的が実現できるのかを検討する必要があります。そして、その目的をできるだけ確実に実現するためには、その検討の結果、その目的を実現する方法に関する、なるべく真理に近い見解、あるいは、なるべく正当性を備えた見解を手に入れる必要があります。すなわち、(事柄1)と(事柄3)で言われていることが必要になるわけです。

次に、二つ目の理由を述べましょう。自分の意見を生き生きとした仕方でもち、その意見の根拠を明確に理解することは、自分の精神的な能力を自発性にもとづいて自分なりに発展させ発揮するために欠かせない要素です。そして、なるべく多くの人が、このような仕方で自分なりに精神的な能力を発展させ発揮する(すなわち個性を發展させる)ことは、「個性を重んじる功利主義」が目指す目的でもあります。だから、「個性を重んじる功利主義」が目指す目的を実現するためには、(事柄2)が欠かせません。

最後に、三つ目の理由を述べましょう。自分の意見に対する反論を論駁したり、その反論によって自分の意見を訂正していくことも、自分の精神的な能力を自発性にもとづいて自分なりに発展させ発揮する(すなわち個性を發展させる)ために欠かせない要素です。そして、先に示したように、自分の意見に正当性をもたせるためには、自分の意見に対する反論を論駁したり、その反論によって自分の意見を訂正することを続けていくことが必要です。だから、(事柄3)を実現することは、「個性を重んじる功利主義」が目指す目的を実現するために欠かせない要素を提供してくれます。

以上のような理由で、(事柄1)と(事柄2)と(事柄3)は、「個性を重んじる功利主義」が目指す目的を実現するために必要である、と言うことができるでしょう。だから、おそらくミルは、少なくとも今述べた理由で、(事柄1)と(事柄2)と(事柄3)が「個性を重んじる功利主義」が目指す目的を実現するために必要である、と考えたのではないかと私は推測します。そしてミ

ルは、このような意味で（事柄1）と（事柄2）と（事柄3）が重要である、と考えたのではないのでしょうか。とすれば、先に述べたように、ミルは（事柄1）と（事柄2）と（事柄3）を実現するためには言論の自由が必要である、と主張しているわけですから、ミルは「個性を重んじる功利主義」にもとづいて言論の自由の必要性を説いている、とすることができるでしょう。

5 おわりに

ミルは、『自由論』の第2章の最後で、次のように述べています。

以上で、人類の精神的幸福にとって、意見の自由と意見を表明する自由（人類の他の幸福はすべてこれらの自由に左右される）が必要であることを明らかにした。（『自由論』、第2章、第40段落）

この文章で言われている「精神的幸福」とは、自分の精神的能力を自発性にもとづいて自分なりに発展させ発揮する（すなわち個性を発展させる）こと、ならびに、それによって得られる高級な快楽を享受することである、と私は考えます。この文章でミルは、そのような幸福を得るためには言論の自由が必要である、ということを論証した、と明言しています。すなわち、「個性を重んじる功利主義」にもとづいて、言論の自由の必要性を論証した、というわけです。私は、ミルが展開している、言論の自由の擁護のためのこのような議論に強く共感します。そして、皆さんにも、ぜひミルの『自由論』を読んでもらって、改めて言論の自由の重要性について考えてほしいと思っています。